

自閉スペクトラム症児に対する支援について
～なぜかな？ どうしてだろう？ の視点を大切に～

長崎県長崎市立上長崎小学校 教諭 西岡 英津子

1 はじめに

本校は、長崎市の中心部にあり、創立145年の歴史ある小学校である。児童数は約310名の中規模校である。学校の周辺には、長崎くんちで有名な諏訪神社があり、秋には祭りの雰囲気にも包まれる。子供たちも穏やかな雰囲気でも、とても素敵な学校である。しかし、この文章を書いていた頃には、コロナ禍の世の中になることなど、全く想像もしていなかった。今年の長崎くんちは、コロナの感染拡大防止のために中止となった。稽古に励む大人や子供たちの姿が見られない寂しい夏である。ちなみに中止は昭和天皇の体調悪化が理由だった1988年以来で32年ぶりだそう。

現在、本校には、知的障害特別支援学級が1学級（5名）、自閉症・情緒障害特別支援学級が2学級（7名と8名）、LD・ADHD通級指導教室が1教室（13名）設置されている。特別支援教育支援員は3名配置されており、通常学級にも支援を要する児童は多く、その役割も年々大きくなっていると感じている。

紙面での発表となり、わかりにくいところも多いと思うが、少しでも参考にしていただけたらと思う。

2 学級の状況

「先生、申し訳ないけど、結構大変なことになっています。よろしくお願いしますね。」昨年度赴任したときに校長先生からいただいた言葉である。C児は交流学級の学習中に教室から飛び出したり、行方が分からず複数の教員で学校中を探したりすることもあったそう。新しい学校で、子供たち、保護者と出会うにあたって、それなりの覚悟が必要だと思いがらの赴任となった。

私が担任した特別支援学級は、オアシス学級という素敵な名前である。令和元年度は、児童6名（自閉スペクトラム症5名・ADHD1名※）、令和2年度は、転出や新たな入級などで、入れ替わりもあり、児童8名（自閉スペクトラム症4名・ADHD4名※）となった。

※診断名は、医療機関によって多少表現が異なるが、統一して表記した。また、両方の診断がある児童もいるが、主障害での人数にしている。

〈児童の実態〉 令和元年度～令和2年度

	児童の様子（年度当初の様子から。現在は大きく成長している！）
A児（女）	一人遊び多い。交流では緊張大。スケジュールの確認必須。不安感大きい。頑張り屋さん。
B児（男）	小3より入級。手先不器用。不注意系のミスが多い。漢字の読みは得意、書きは苦手。
C児（男）	小4時、飛び出しが多かった。注意を受けると、叩く、噛み付くなどの行動もあり。
D児（男）	教室にいられないことが多々。落ち着くまで、段ボール箱の中で過ごしていた時期も。
E児（男）	少しのことで泣くことが多い。困っていても伝えられない。食べられる食材が少ない。少食。
F児（男）	生活リズムを整えるのが難しく、遅刻多い。聴覚過敏もあるが、音楽を覚えるのは得意。
G児（男）	天真爛漫。心優しいところも。時と場に応じた行動ができない。大声で叫ぶ、場を離れる。
H児（男）	小2より入級。口の中に物を入れることが多い。手指や足指の爪かみ。口の中のつば遊び。
I児（男）	小2より入級。注意集中の持続が難しい。次々に気が移り、すべきことを忘れてしまう。

3 支援・指導の実際

(1) 児童に応じた目標設定

子供たちと出会って、学校生活の様子を観察しながら、それぞれの児童に応じた目標を設定することにした。特に、1学期はあまり欲張らずに、重点項目を一つくらいに絞っていくことにした。知的障害特別支援学級と違い、本学級の児童は交流学級で過ごす時間も多いため、自立活動として確保できる時間数も多くはない。そのため、学校生活全般で、自立活動の目標を意識しながら支援することとした。

令和元年度	児童の様子から目標の設定	自立活動の内容から
A児(女)	交流学級でも生き生きと楽しく過ごせ、笑顔が増えるように。	⑥コミュニケーション
B児(男)	手先の不器用さをカバーするような学習支援。情緒安定。	⑤身体の動き
C児(男)	パニック時の他害行為減。飛び出さずに済む方法を確立。	③人間関係の形成
E児(男)	困ったときに泣かずに言葉で伝えられるように。	⑥コミュニケーション
F児(男)	生活リズムの形成。遅刻しても登校したことを認めながら。	①健康の保持
G児(男)	状況に応じた言葉使いや声の大きさなど場に応じた表現。	⑥コミュニケーション

(2) 家庭との連携とともに専門機関との連携を

最近では、各家庭でそれぞれに大きな問題を抱え、悩みながら生活されていることも多い。まるで、現代社会を凝縮したようである。保護者の安定が子供の心の安定につながることを考えると、担任としても、できるだけ温かい気持ちで保護者を支えたいと考えた。教員ができることは限られてはいるが、できる範囲で行いたいと思っている。そこで、欠かせないのが専門機関との連携である。特に、保護者に支援が必要な家庭については、多くの専門機関に関わってもらうことで、児童の安定を図る助けとなった。下記の専門機関以外にも、児童が利用している放課後デイサービスや学童などとも、連携をとるように心掛けた。学校生活で変化が見られた時には、保護者に家庭での様子を尋ねるだけでなく、学童の先生にも児童の様子を尋ねるようにし、家庭では見えない行動や様子を把握するようにした。

連携する専門機関 など	主な内容
SC (スクールカウンセラー)	児童との面談 保護者との面談 発達検査 など
SSW (スクールソーシャルワーカー)	家庭への介入支援 保護者支援 施設利用の紹介 など
医療機関	定期的な受診 療育 発達検査 薬の服用 など
児童相談所	保護者からの相談 子育て支援 支援会議 など
市子育て支援課	保護者からの相談 子育て支援の情報提供 など

(3) 教室環境の構造化と教育支援員の配置

昨年度、本学級は校舎4階に配置されていた。オアシス教室は、前半分が学習スペース、後半分が休憩スペースといったつくりになっていた。ただ、オアシス1組と2組が共同で使っていたため、教室の前半分で4学年が同時に学習することもあった。そのため、音読などをするときには、お互いに気を遣いながらの学習で、ただでさえ集中力が削がれやすい子供たちにとって、学習環境としてはあまりよい環境とはいえなかった。しかし、その中で工夫しながら、学習する習慣をつけさせたいと考え、学習内容によっては、隣のプレイルームに移動するなど、両担任で工夫しながら1年間を過ごした。

今年度は、学級数の減少もあり、校舎の1階にオアシス1組用、2組用と、それぞれ教室をいただいた。自閉スペクトラム症の特徴を考えると、学習スペースや休憩スペースをきちんと分けることは必須である。できるだけわかりやすい構造にしたことで、学習中の離席もなくな

り、学習への集中の仕方もよい変化が見られてきた。昨年度は、ぐちゃぐちゃと散らかしっぱなしだったおもちゃ類も整理をし、子供が自分で片付けがしやすいように整えつつある。今後も子供たちの様子を見ながら、工夫をしていきたい。

長崎市では、特別支援教育支援員として、希望する学校に支援員が配置される。しかし、人数も限られていることから、希望通りにはいかないことも多い。担任も複数学年の児童を受け持っているとして、1日の中で一人の児童につける時間は限られてしまう。C児の飛び出しが多かった年は、支援員がつけなかったことも、C児の行動面に影響を与えたと思われる。交流学級の担任も、C児だけに対応している訳にはいかず、教室からの飛び出しが繰り返されていく中で、彼にとってはそれが日常の行動として誤学習されたまま定着してしまっていたのかもしれない。幸い、私が赴任した年は学校に支援員が2名配置となり、C児には必ず私か支援員がつけるようになった。このことで、C児が学校で落ち着いて生活できるようになってきたことは大きいと思われる。もちろん、行動がすぐに変化したわけではなく、そこに至るまでの苦労は多々あったが、人的な支援が大変重要だということを実感した。

(4) 専門性を高めるために

日常生活の中での指導の工夫を重ねるためにも、研修会などへの参加は積極的に行った。(コロナ禍までは…。現在はほとんど中止になっている。) 私が初めて特別支援学級の担任をしたのは、平成19年、ちょうど特殊教育から特別支援教育へと名称が変わった年だった。その時の私は全く知識も経験もなかったため、当時必死で知識を詰め込んだ。その当時学んだことを生かしている部分もあるが、自閉スペクトラム症については、近年さらに研究が進んでいることをとても感じている。研究会に参加するたびに、新しい情報を学ぶことができ、継続的に学んでいく必要があると思っている。自閉スペクトラム症の子供たちと関わる先生方には、ぜひ最新の情報を学んでほしいと思う。特別支援教育の指導支援方法なども多岐にわたり、細分化されている。

研修会の講師についても変化を感じている。以前は大学教授などから基礎的な知識を学ぶことが多かったが、最近では、講師も多岐にわたってきている。私が参加した中では、弁護士、SC、SSW、精神科医、特別支援教育士、作業療法士、障害者職業カウンセラーなど、それぞれの専門的な立場からの経験や知識を興味深く学ぶことができた。特に、就労につながる面では、小学校の段階で何を準備しておいたらよいか、指導や支援の視点を明らかにできることも多かった。

4 成果と課題

成果としては、たくさんの方が関わることで、子供たちの行動が変わっていくことを、身をもって体験できたことである。児童の誤学習された習慣を変えていくには、精神的にも体力的にもかなりのエネルギーを必要とした。その中で保護者の言葉は支えとなった。「先生、とことん息子と戦ってください。私もできることはします。」崩れてしまった学校での行動をどうにかしたいという思いを強くもたれていた。保護者と同じ思いでスタートできたことは、大きな力となった。保護者からC児の好きなキャラクターなどをリサーチし、頑張った後のご褒美タイムや頑張りカードのシールなどには、それらをとことん活用した。些細な行動についても、なぜこのような行動をしたのか、理由は何だろうと、前後の行動も確認して考えるようにした。

交流学級の先生の存在も大きかった。「今何をするのか」それをどの子にもわかりやすく伝えてくださった。この当たり前のことを行ってくださることで、C児は交流学級で過ごせるようになっていった。前年度の様子を実際に目にしていないのだが、「何をしたらよいかわからない」から、教室から飛び出すという行動も多かったのではないかと考えられる。

本校では、「おはようランニング」と称して、全校で朝のランニングに取り組んでいる。C児も、

走ったり歩いたりではあるが、毎朝運動場を1周する。その時に必ず笑顔の校長先生とハイタッチをする。毎朝恒例の行事だ。その光景を眺めるのが、私は大好きである。心がほっこり温かくなる。宇宙語で交信しているような挨拶を楽しんでくださる先生もいらっしゃる。C児は地面にごろごろ寝そべっていることも多いのだが、「今日も大地の波動を感じているのですね〜。」と私に温かく声を掛けてくださる先生もいらっしゃる。私との約束を破って、C児が正門からバス停へと飛び出してしまうときも、必ず声を掛けてくださる先生がいる。支援員の対応もありがたかった。気になったことを確実に伝えてくださり、情報を共有したうえで支援にあたることができたのは、児童にとっても混乱が少なかったと思われる。

現在、C児はにこにこ穏やかな笑顔で毎日を過ごすことができている。朝の約束である「正門内であいさつ運動」というルールも守れるようになった。穏やかに学校生活を送ることができるのは、このようにたくさんの方の関わりがあってである。特別支援学級の担任だけでは解決できないことも多い。困ったときには、ぜひ周りに相談してアイデアをもらい、助けてもらってほしいと思う。1人より2人、2人より3人…。

課題としては、教室環境の整備があげられる。今年度は、運よく教室をいただけたこともあり、構造化の工夫に少しずつ取り組むことができたが、予算がないとできないこともある。児童のこだわりや感覚の過敏性もそれぞれである。音に敏感な児童に適した場所や構造になっているか、匂いに敏感な児童に適した場所なのか、考えていくとベストはないだろうと思う。しかし、少しでもベターな条件になるように、自閉スペクトラム症の児童に応じた環境を準備し、できるだけ穏やかな状況の中で、学校生活を送れるようにすることは大切だと考える。難しい面もあるが、今後も工夫していく必要があると感じている。

5 おわりに

教員の専門性を高めるために大切なことは、自閉スペクトラム症について専門的な知識を学ぶことももちろんだと思う。しかし、それ以上に大切だなと感じるのは、目の前にいる子供たちをどれだけよく見ることができるか、ということだと最近特に感じている。

子供たちの問題行動が起こった時に、なぜこのような行動をするのだろうか、問題はどこにあるのだろうかと考え、観察し分析する力が必要なのだと感じる。子供に寄り添い、子供の行動を理解しようとする気持ちがあれば、専門的な知識や経験が足りなくとも、むしろそれを上回る指導力を発揮するような気がしている。

そして、支援にはたくさんの方の目と手が必要なことも理解しておく必要があると思う。困ったときに、同僚に相談すること、支援員との情報交換を密にすること、保護者に話を聞いてみるなど、自分一人で抱え込まずに、周りに情報を開いていくことが、必ず解決の道筋につながるからである。

飛び出しなどが多かったC児も、朝はたくさんの方の先生方に声を掛けてもらいながら、今では落ち着いて学校生活を送っている。中学校進学までに、取り組むべき課題は多いが、保護者とも相談しながら、できる限りのことをして、無事に卒業式を迎え、中学校に送り出したいと思っている。

小学校で身に付ける基本的な生活習慣は、将来働くときに土台の部分になる。この子供たちが、それぞれに合った仕事を見付け、笑顔で働き続ける日が来るよう、今できる指導・支援を精一杯行いたいと思う。

今回、このような発表の機会をいただき、改めて自分の学びや経験、そして心の中にあった子供たちへの思いなどが整理され、またこれから頑張っていこうという気持ちになった。もし悩んでいる特別支援学級の担任の方がいらっしゃるとしたら、子供たちのために、周りの方に相談し、協力してもらいながら頑張してほしいと思う。少しでも参考にさせていただけたら幸いである。